

〔若手研究者よりの報告〕

『ジハード』 翻訳雑感：グローバリゼーションをめぐる卓越した思想劇

田ノ口誠悟

6月に、戯曲翻訳のお話を頂いた。ベルギーの劇作家イスマエル・サイディの『ジハード』(Ismaël Saïdi, *Djihad*)である。近年フランス語圏で問題になっている、イスラム過激派に共感し、その中東地域での戦闘に参加する移民の若者達を描いた作品で、12月に東京芸術劇場で上演するという(リーディング公演、国際演劇協会日本センター主催「紛争地域から生まれた演劇」)。

私の専門は20世紀フランス演劇研究であり、最近劇作家ジャン・ジロドゥと演出家ルイ・ジューヴェの仕事、同時代における国際文化交流・多文化主義の流行の観点から語り直す博士論文の執筆を進めている。『ジハード』は、「移民」という多文化的存在を扱っている点で、そのような私の関心に重なる作品だと思い、翻訳をお引き受けすることにした。また、近年欧州で頻発しているイスラム系移民による大量虐殺事件に私も興味を持っており、翻訳、上演を通してこの問題について理解を深めることができるのではないかとも思った。

初めての戯曲翻訳であること、また、現代ベルギー社会、移民問題についての知識の欠如もあり、作業は困難を極めた。ご迷惑をおかけした演出の瀬戸山美咲さんをはじめとする『ジハード』座組の皆さんにはこの場を借りてお詫び申し上げる。しかし、難産ではあったものの、モロッコ系移民二世である作者がマリーヌ・ル・ベンの排外主義的言説に突き動かされて書いたというこの物語に、私はすっかり魅了されてしまった。この春出版された『国際演劇年鑑 戯曲集』に本作の「解題」を執筆しているのですが、作品の詳説はそちらに譲るが、「移民問題」を、宗教対立や民族対立といった、イデオロギーの問題としてではなく、個人のアイデンティティの問題として描いている点が面白いと思った。「同胞」であるイスラム教徒を守るべく、欧米の軍隊との戦いに出発する移民二世の主人公三人は、実は祖国の宗教・文化をほとんど忘却してしまっている。かといっ

て出生国ベルギーでは、その外見から永遠の他者として差別される。彼らは、アッラーの教義にも、ヨーロッパの伝統文化にも完全に同化できないまま、レコード・ミュージック、マンガ、ゲームといった、匿名的ポップ・カルチャーを心のよりどころにして生きている。主人公たちが「ジハード=キリスト教世界との戦い」に参加するのは、そんな自らの脆弱なアイデンティティをイスラム原理主義のイデオロギーによって再建するためなのである。しかし「異教徒」との戦闘の中で次々と仲間が死んでゆくを見るうちに、特定のイデオロギー、政体(それがイスラム教であれキリスト教であれ、祖国であれ民族であれ)に自らの心を預ける愚かさを彼らは知ることになる。

近年の文化論には、グローバル経済の進展によって国境、国民意識、民族的伝統といった近代的価値観が揺らいだ結果、世界中の個人が恒常的なアイデンティティ・クライシスに陥っていると見る見方があるが(参照:渡辺靖『文化』を捉え直す:カルチュラル・セキュリティの発想、岩波新書、2015年)、『ジハード』が描いている人々も、まさにこの悲劇に身を置いている。その意味でこの戯曲は、ある特定の社会の問題をあつかった政治劇ではなく、現代世界においてはどこでも、だれにでも起こりうる問題を扱った普遍的な思想劇だと言える。

日本語版『ジハード』は、複数回の稽古の後、2016年12月17日、18日に無事上演された。両日とも立ち見が出るほど盛況であり、同時代外国戯曲の初演としては、大きな成功を収めたといっていだろう。大きく取り上げてくれたメディアもあった(東京新聞、2016年12月13日夕刊)。

しかしこのリーディング公演だけで、この作品を十全に理解し、表現し得たとは思えないだろう。先に述べたとおり、『ジハード』は現代世界のきわめて普遍的なテーマをあつかった思想劇である(だからこそフランス語圏各地の劇場で6万人近くを動員し得たのだ)。その思想性を咀嚼し、共有し、日本の文脈の中で語り直すには、一週間程度の稽古では足りなかった。近い将来、今回と同じ座組で本格的な上演が出来れば、と願っている。演出家の瀬戸山さん、そして演者の皆さんも同じ気持ちではないだろうか。私はそのときまで、『ジハード』という奇跡の作品について勉強を続けるつもりである。